

〔実践例4〕 高等学校第3学年

ニードルによる目立ての効果を生かすメゾチントの制作（全18時間）

県立教育センター指導主事 鈴木 晃

県立新潟南高等学校教諭 阿部 誠也

1. 生徒の概要

対象生徒は、大学入試を目前に控えている第3学年美術選択クラスの全員8名（男子3名、女子5名）である。生徒のほとんどが、これまでに塩ビ板によるドライポイントや紙版（ドライポイントプレート）を使った一版多色版画などを経験しており、凹版画の原理や方法については理解しているといえる。しかし、銅版画はもちろんのこと、メゾチントによる銅版画制作は初めての経験となる。

2. 題材のねらい

メゾチントによる銅版画の制作は、新しい体験に対する欲求の強い高校生にとって、少なからず興味関心を引くことができると考えられる。本題材の主なねらいは次のとおりである。

- (1) 銅版画の一技法であるメゾチントの制作を通して、版画全般に対する関心を高める。
- (2) 黒の美しさや目立ての効果など生かして、創造的な版表現ができる。
- (3) 目立て、製版、刷りの過程を通して、版画制作の技能を高め、創造する喜びを実感できる。

3. 展開の構想と工夫

本題材では、単調で苦痛の伴うニードルによる線引き目立てメゾチントの素地をつくり、バニシャーによる手工芸的な方法で版面に絵柄を磨き出して製版し、刷りの工程で初めて自分の作品と出会うことができる。これら「単調で苦痛を伴う目立て」「手工芸的な製版」「期待と不安の交錯する刷り」のそれぞれの工程には、メゾチント制作特有の制約と不自由さが伴うがゆえに、生徒は、版画制作の醍醐味を創造活動の喜びとして実感できるに違いない。

本題材では、題材のねらいを効果的に実現するために、次の指導上の工夫を採り入れた。

- ① 生徒一人一人が自由に発想・構想してテーマを決定し、メゾチントの効果を表現に生かすために、メゾチントの魅力である黒の美しさに着目させる。
- ② テーマを捕えにくい生徒には、蔵書票や年賀状などを想定して制作することを助言する。
- ③ 下絵の段階での明暗のバランスや諧調などの検討に配慮する。
- ④ ニードルによる目立てとバニシャーによる磨き出しの方法を理解したうえで製版の作業に入る。

4. 評価

- (1) 意欲的に取り組み、版画全般に対する興味関心が広がったか。（関心・意欲・態度）
- (2) メゾチントの特性を踏まえ、自由な発想と構想による絵づくりができたか。（発想・構想の能力）
- (3) 黒の深さや明暗の変化の美しさなどを効果的に生かし、創造性豊かな版表現ができたか。
・工具の使い方を工夫して目立てや製版をし、適切な方法で刷ることができたか。（創造的な技能）

(4) 版種や版の形式を理解し、さまざまな版表現に関心をもってみたいことができたか。(鑑賞の能力)

5. 準備

(1) 生徒 定規, スケッチブック

(2) 教師



① 参考資料 画集(長谷川潔, 浜口陽三, 日本の書票, 年賀状版画), メゾチント作品及び原版, プリント(銅版画ノート36~47P, 視覚デザイン研究所編)



② 材料 銅板9×11cm各1, トレーシングペーパー各1, カーボン紙, 版画紙(ブレダン, ハーネミュレ), 版画用油性インク(黒<さくら>, 青茶<文房堂>), リグロイン, あい紙, 寒冷紗

③ 用具 版画プレス機, ジスクサンダー1, 金工ヤスリ(仕上げ用)5, スクレーパー1, ニードル(千枚通し)各1, バニシャー(革工芸用のモデルを加工しておく)各1, インディア砥石1, 砥石用オイル1

6. 指導の実際

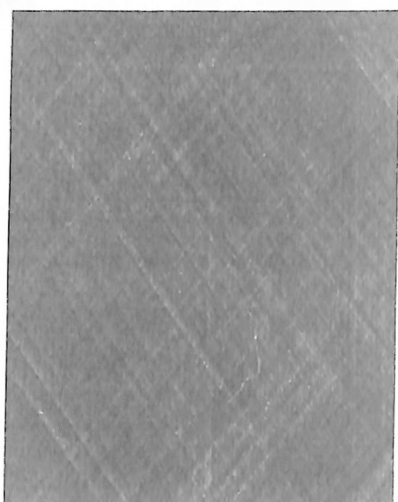
段階	学 習 活 動	具体的な活動及び教師の働きかけ	生 徒 の 反 応	
第一次 導入・準備 (1時間)	メゾチント作品を鑑賞する。(15分)	<ul style="list-style-type: none">メゾチントによる作品(画集, 実作品)を提示し, 感じたことを自由に述べさせる。実作品の原版を見せる。作品の制作の工程(目立て, 製版, 刷り)を実演する。* 次の授業までに下絵を考えて来ることを告げる—テーマは自由。イメージの湧かないもののために蔵書票, 年賀状などを想定することを助言する。(参考資料—日本の書票)	「きれい」 「これ彫ったの?」 初めて見る作業に興味を示す。 参考作品を眺め「こんな感じのを作りたいな」(女子A)	
	メゾチントの方法を理解する。(20分)			
	課題を知る。(5分)			
		参考作品と原版		ジスクサンダーでビゾーをとる
	ビゾーをとる。(10分)	<ul style="list-style-type: none">ジスクサンダーを使って銅版の四辺を斜めに削る。(この傾斜は刷りの際に紙を破かないために必要)		

		であることを伝える。)	
第二次 発想・構想 (1時間)	<p>下絵を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発想 ・構想 <p>(1時間)</p>	<p>用意した下絵をもとに、白と黒の美しさを生かすように検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グラデーション、タッチの効果を示した作品例を示す。 ・白と黒のバランス、微妙な諧調、線描による（ハッチング）効果等に注目させる。 <p>完成作のイメージを把握するために、鉛筆で白黒の配分、トーンを明確にする。</p> <p>* 下絵は、目立ての作業が終わるまでに完成させる。</p>	<p>ほとんどの生徒がイメージがまとまらないまま目立ての作業に入る。</p>
第三次 制作	<p>＜製版1＞ 目立てをする。 (6時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目立ての要領を説明し、目立てに入る。 ①を示範し、②の要領を説明する。 ① 定規を使ってまずニードルで縦横斜めに目安になる線を引き、できるだけ線の間隔を空けないような平行線で第一面を埋めつくす。（定規の厚みとニードルの角度を利用すれば一回に3～4本の線がひける。） ② 第二～四面の目立てをする。 ③ ①～②を1セットとして、最低4セット繰り返す。目立ての回数はメモさせる。 	<p>「わーめんどくさそう」</p> <p>力の入れ具合やニードルの角度により、ささくれのつき方が、生徒により違いがでる。</p> <p>線引きの方法がわかり目立ての作業に没頭し始める。</p>
			
	<p>* この間ニードルの先は度々オイルストーンで尖らせるようにする。</p> <p>時間内で終わらない場合は、自宅課題とする。</p>		
作	<p>試し刷りをする。</p> <p>(1時間)</p>	<p>バットにつけてぬらし、ビニルでくるんで（30分）一昼夜おいた版画紙（ブレダン紙）を用意しておく。（教師）</p> <p>目立てが終わったものからインクをつめ、寒冷紗で拭き取り、試し刷りをする。</p> <p>刷りの状態を見て目立て不足の場合は、目立てを数回重ねる。</p>	<p>刷り上がりの黒さが足りないものが多く、やや力を入れるようにして1～3セットの目立てを追加させる。</p>

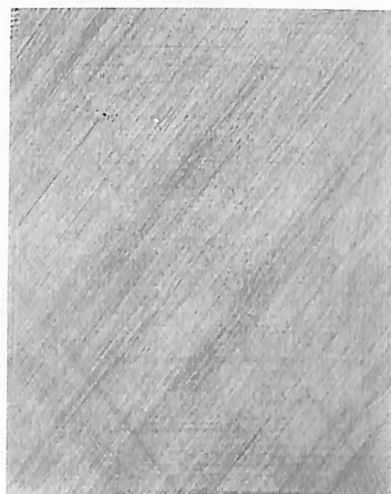
第 三 次 制 作	<p>＜製版２＞ 下絵を転写する。</p> <p>パニシャーの使い方を理解し、製版する。</p> <p>(6 時間)</p>		<ul style="list-style-type: none">・下絵にトレーシングペーパーを当てて写し取って裏返しにし、カーボン紙と鉛筆を使って版面に転写する。(ボールペンは不可)・パニシャーの滑らかな部分で明るくしたい部分をなでるようにていねいにつぶす。(必要に応じてスクレーパーを使用する)・一度に明るくしようとせず、全体を見ながら仕事を進める。 <p>* 版面にトレーシングペーパーをあてると版の状態が大まかにわかる。この方法で時々製版の具合を見る。</p>	<p>目立ての終了に差が生じるが、早く終わったものから下絵の構想を深め、下絵が決定したものから転写、製版の作業に入る。</p> <p>研ぎだして絵が浮かび上がることに興味を示す。</p>
				
	スクレーパーで削る		試し刷りを見ながら版に修正を加える。	
	<p>試し刷りをする。</p> <p>(1 時間)</p>	<ul style="list-style-type: none">・インクにつめ方、拭き取り方、紙の扱い、プレス機の扱いに注意しながら実際に刷って見せる。・刷った作品は、ベニア板に水張りテープで張りつけて乾燥させる。	<p>一番早い生徒が試し刷りに入った時点で、まだ約半数の生徒が目立ての作業を続けている。</p>	
<p>版の修正をする。</p> <p>(1 時間)</p>		<ul style="list-style-type: none">・刷りの具合を見て、版に手を加える。白黒のコントラスト、バランス、トーンなどを整える。		
<p>本刷りをする。</p> <p>(1 時間)</p>		<ul style="list-style-type: none">・試し刷りの要領で、一人 3～4 枚を刷り、一枚を提出する。・提出作品にはタイトルとサインを記入させる。エディションの意味など説明する。		

7. 生徒作品

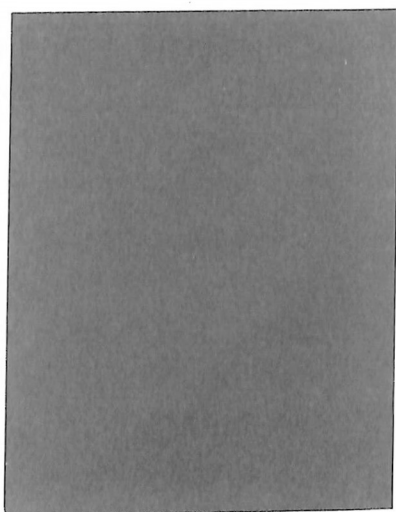
(1) 目立ての経過



① 女子生徒H 4セット（16面）

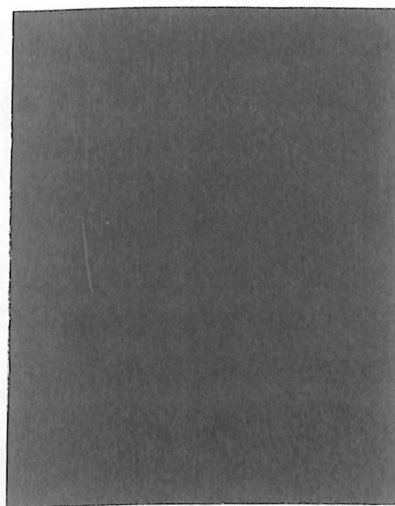


② 女子生徒M 4セット（16面）



③ 女子生徒H

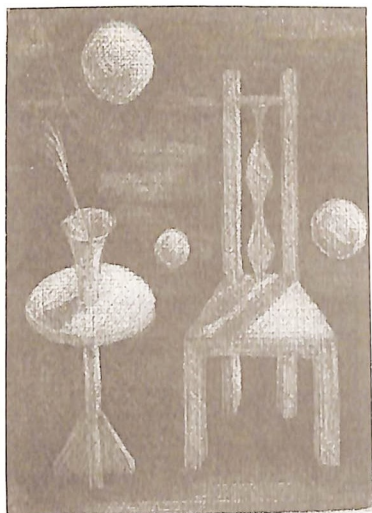
①に2セット（8面）追加 計6セット（24面）



④ 男子生徒S 4セット（16面）

①は女子生徒H，②は女子生徒Bの4セットの目立てをした時点での試し刷りである。①は格子状の模様が現われているものの，深みのある黒い面となっていない。また，②は格子状の模様も色浅く，深みのある黒い面には程遠い。③は女子生徒Hが，①にニードルに少し力を入れて2セットの目立てを追加し，計6セットの目立てを施して深みのある黒を得たものである。このように女子生徒のほとんどは非力で，ニードルにかけられる力が弱かったために，予定のセット数を終了してもなかなか求める黒が得られなかったが，何回かの試し刷りの結果からニードルにかけられる力を大きくすることを体得していった。男子生徒の中には，初めからニードルに相当の力で線引きして予定のセット数で目立てを完了するものがいた。④はその生徒のものでニードルによる刻線が，レリーフ状に紙に写し取られている。

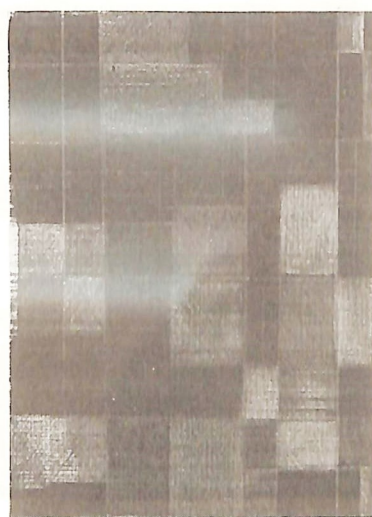
(2) 生徒作品



作品A 女子生徒H



作品B 女子生徒K



作品C 女子生徒U



作品D 女子生徒M

① 作品 A

目立て、下絵の構想、製版、刷りとともに概ね順調に進み、一番最初に完成した生徒の作品である。画面全体をおおうニードルによる格子模様と、右斜め上方から差し込む光が絡み合って、暖かな感じの画面をつくりあげ、メゾチントの特徴を効果的に生かすことに成功している。

② 作品 B

大きな建築物と小さな人物により、ドラマチックな場面の構成を試みた。製版の途中で、磨き出し過ぎてめりはりがなくなったため、部分的にニードルできずをつけて暗部を作った。しかし、明暗のバランスや配置があいまいなために、画面から受ける印象はそれほど強いものとはなっていない。

③ 作品 C

クレーの作品のイメージから幾何学的な抽象表現を試みたものである。黒地の部分が余白としてしか感じられない。白と黒のバランスやめりはりと調子の変化をいっそう工夫し、画面に広がりとお行きなどの豊かさを求めなければならない。まだ制作途中といえる作品である。

④ 作品 D

目立てを終了した時点で、下絵をじっくり考える時間がなく、コーヒーカップの図柄を参考にしたもので、創造性に欠けるものである。製版も白と黒のめりはりに欠け、全体に暗いものとなっている。

8. 結果の考察と今後の課題

「 」内は、「メゾチントの制作を終えて」の感想レポートによる生徒の声である。

- (1) 導入段階では、メゾチント作品（実作）やその原板を鑑賞することで、生徒の何人かがメゾチント作家の個展などに積極的に出かけるなど、生徒のメゾチントに対する興味関心を高めることができた。
 - ・「様々なメゾチントの作品が見られておもしろかった。これでまた興味が一つふえた。」
- (2) ニードルによる目立ての作業は、4セット重ねてもなかなか求める黒にならない生徒が多かったが生徒全員が深い黒を執拗に求めて、目立ての作業に意欲的に取り組んだ。
 - ・「最初のうち、あまり力をかけずに線を引いていたら、全然黒くならなかった。一本引くだけでも手が痛くなるくらいがちょうどよいと思った。」
 - ・「目立ては、とにかく時間がかかった。手も痛くなり自習の時間を見つけては目立てをやっていて、他の生徒たちにうるさい音を出して迷惑をかけながらもやった。」
 - ・「半分以上は目立てに時間を費やし、黒くするまでには大変苦労し、手も痛くなったのを思い出します。でも1回2回と刷るにあたって違いがはっきりとでたときはうれしかったです。」
- (3) 大学受験を目前にした生徒たちにとって心理的に落ち着いて取り組めない状況があった。また、目立てに多くの時間を費やすことがアイデアの構想を深める時間的なゆとりをなくすことになった。これら生徒の心理的な不安と時間的な制約の中での授業の結果、完成作品8点中3点がイラストなどを参考にしたもので、創造性に欠けるものとなった。このような場合、目立ての作業と表現のための発想・構想の時間的配分を検討する必要がある。また、黒の深さ、魅力を表現に効果的に生かすための課題吟味と条件設定を工夫する必要がある。
 - ・「もっと早い時期（せめて1学期）にやりたかった。そうすればもうちょっと調べて真面目にがんばったのに。でも卒業してからでも、いつか余裕ができたらかわいい書票をつくってみたいと思う。」
- (4) ニードルの目立てによるメゾチント制作の製版や刷りの過程を通して、生徒は手作業による充実感と刷りの喜びを、創作活動の喜びとして味わうことができた。
 - ・「予想以上に大変でした。そのぶん出来たときは嬉しかったです。ニードルやバニシャーを使うのが初めてだったり、黒い下地に白く描いていくという普段とは反対の感覚も味わえてよかったです。」
- (5) メゾチントの繊細な効果に気づかせることで、銅版画作品の見方を広め深めることができた。

VIII 研究の成果と今後の課題

1. 「作家の方法に学ぶ」から

長谷川潔の初期の作品に見られる「線引き目立ての併用による独創的な方法」と後期の作品の「コントラストの単純化とハーフトーンの制限」、また、浜口陽三の作品に見られる「ハーフトーンを基調とした目立ての方法」とこれを応用した「カラーメゾチントの方法」、さらに、色面づくりから生み出された池田満寿夫の「ルーレットメゾチント」、深澤幸雄の「電動目立て機制作」など、それぞれの作家がそれぞれの表現意図の達成や独自性の追求のために、必然的にさまざまな技法の探究や工夫を試みていることがうかがえる。

2. 制作の実態から

(1) 目立て、製版の方法について

細かい目のベルソーによる目立てでは、バニシャーの磨きつぶしだけによる製版が可能であり、「製版のしやすさ」「微妙なハーフトーンの効果」という長所がある。また、より荒めのベルソーによる目立てでは、スクレーパーによる削り出しが必要となるが、「ベルソーによる目立ての効果」「刷りに対する版の耐久性」という長所がある。このような目立ての方法の違い、バニシャーやスクレーパーによる製版のしやすさや黒の強さや肌合いの違いなどとなって表われることを具体的に示すことができた。

大きな作品のために利用し始めた電動目立て機による目立ては深く、版面が硬くなって製版に四苦八苦する場合がある。目立ての加重の調整とともに、機械の構造なども検討していきたい。

(2) 刷りについて

普通の刷りは、本研究の方法でおおむね良好である。「雁皮刷り」は、大きな作品を印刷するときの刷りむら無くし、色インクで印刷するときに落ち着きを持たせるのに有効であるが、「インクの強さがやや弱くなり、作品全体がやや暗くなる」「雁皮紙が作品に硬質な肌合いをもたらす」ということを考慮した製版や刷りにあたる必要がある。さらに多色刷りによる方法で色彩の効果についても研究を進めたい。

3. 授業実践から

(1) 生徒の興味・関心を引き付けるために行うメゾチント作品や原版の鑑賞などは効果的である。

実践例1, 3, 4では、導入時にメゾチント作品の画集、作家の実作品や原版などの鑑賞を行ったが生徒がメゾチントの表現効果の特性に気付き、興味・関心を喚起するには十分であった。鑑賞する作品が、作家の作品とともに、過去の生徒作品などもあわせて鑑賞すれば、より身近な課題として生徒に受け止められよう。実践例3, 4では、実際の刷りを示すことで刷りに対する興味・関心も高めることができた。さらに銅板、目立て済銅板、製版を終えた原版、原版により刷り上げた作品など、制作の過程がわかるような参考作品の提示の工夫でよりいっそう、制作工程の理解が深まるであろう。

実践例2では、アイデアスケッチにより、生徒各自の表現主題がほぼ決定した後で、前年度の生徒作品を提示してメゾチント制作へと結び付けた。このことにより、生徒のメゾチントに対する戸惑いが少なくなり、制作はスムーズに運んだ。

- (2) 課題設定は、生徒一人一人が自分なりの主題を持てる幅のある提案が必要。主題を生徒の自由とする場合は、生徒の興味関心や表現力の実態を考慮に入れる必要がある。

実践例1では、物語りの場面や人物の心情から想像して生徒それぞれが主題を決定し、実践例2では「私の心」というテーマのもとに、生徒一人一人のイメージで主題を決定した。これらは、メゾチントの効果を表現主題に有効に生かすための方向性を示す教師の提案であり、美術の課題設定の基本的な方法の一つである。実践例1では生徒のイメージにやや狭まりが感じられ、実践例2は広がりを感じられた。この2つの実践例は、課題設定の仕方では生徒の表現のイメージが変化する事例でもある。

実践例3、4では、メゾチントの版画としての特性や制作方法を理解した上で、生徒一人一人が自由に主題を決定するものであった。後者は、高等学校最終学年ということから、これまでの美術での経験を生かした主体的な表現を期待してのものであったが、もともと発想力や表現力の乏しい生徒にとって自由課題は戸惑いの原因となり、卒業間近の心理的な状況も影響して写真などを写す創造性に乏しい作品が多く見られ、制作進度の個人差も大きくなった。

- (3) 「グラデーション効果を必ず取り入れる」「基本のバックは真っ黒にする」、この2つの条件は、メゾチントの特性を効果的に生かすための条件として有効である。

実践例2では上記の2つの条件を設定し、下絵の段階からメゾチントの特性であるハーフトーンの美しさと黒の深さを表現に効果的に生かすことを生徒に意識させたことは、画面構成の手がかりとして有効であるとともに、その後の製版作業をスムーズにさせた要因にもなった。

- (4) メゾチントの原版の作品化は、生徒の達成感を高める一つの手立てになる。

メゾチントの原版は、製版の過程を通して美しく輝き、それ自体が工芸的な芸術作品としての味わいを持つものである。実践例2では、版そのものの美しさを生徒が実感できるように額装を工夫し、版画作品と工芸作品を比較して鑑賞することによって、制作の達成感を高めることができた。

- (5) 目立ての作業はあまりにも時間がかかり、表現意欲が持続しない。

実践例4では、目立ての効果を作品に生かすために、線引きによる目立てから製版の作業に入った。生徒は、熱中して作業を行ったがあまりにも時間がかかりすぎて表現意欲が最後まで持続しないという傾向が見られた。

4. まとめ

「メゾチント」は、目立てや製版に多くの時間と技術的な熟練を必要とされる版画技法である。そのため、技法のみに目を向けていると、制作の過程で本来の表現の意図が薄れていくことがある。今後は自分自身の表現意図をより明確にした上で、表現意図を効果的に表わすための手段としてこの技法を活用していきたいと考えている。また、「メゾチント」が、中・高等学校の生徒の興味・関心を引き付ける版画教材の一つであることを確認することができたが、ただ単に材料を与え技法を紹介して制作に入るのではなく、生徒一人一人の表現意図を明確にするとともに、その表現意図を効果的に表わすための指導の重要性を実感した。